

木下杢太郎著『唐草表紙』序

夏目漱石

青空文庫



私は貴方あなたから送つて下さつた校正刷五百八十頁ページを今日漸く読みようや了りました。漸くというと厭いやいや々や読んだように聞こえるかも知れませんが、決してそんな訳ではないのです。多大の興味ばかりか、其興味に伴う利益をも受けながら、楽しく読み了つたのです。實をいうと私の都合もあり、又活字組込の關係もありして、長短十八篇の間を休み休み通り抜けたのは、批評を依頼した貴方にも御氣の毒ですし、またそれを御約束した私にも多少の不便は出て来たに相違ありませんが、此陥欠を避ける手段は御互になかつたのですから、それは双方で我慢する事にして、私の御作に対するざつとした考え丈だけを申し上げます。

まずあなたの特色として第一に私の眼に映つたのは、饒かな情緒を濃やかにしかも霧か霞のように、ぼうつと写し出す御手際です。何故ぼうつとしてるかという、あなたの筆が充分に冴え

ているに拘わらず、あなたの描く景色なり、小道具なりが、  
づき 月の暈のように何等か詩的な聯想をフリンジに帯びて、其本  
かか 体と共に、読者の胸に流れ込むからです。私は特に流れ込むとい  
ここ う言葉を此所に用いました。もともと淡い影のような像ですから、  
胸を突つくのも、鋭く刺すのでもない様です。あなたの書いた  
ものうちには、人が氣狂になる所があります。人が短刀で自  
ピストル 殺する所も、短銃で死ぬ所もあります。是等は大概裏から書く  
か、又は極簡単に叙し去って仕舞われるので、当り前の場合でも、

それ程苦痛に近い強烈な刺戟しげきを読者に与えないかも知れませんが、それでも、若しも以上に述べたような詩的の雰囲氣ふんいきの中で事が起らなかったなら、ああした淡い好い感じは与えられますまい。

此ぼうつとした印象が、美的な快感を損そこなわない程度の軽い哀愁として、読者の胸にいつの間にか忍び込む理由を、客観的に翻訳すると色々な物象として排列されます。其内で私は歴史的に読者の過去を蕩とう揺ようする、草双紙とか、薄暗い倉とか、古臭ふるくさい行あんど灯んとか、または旧幕時代から連綿とつづいている旧家とか、温泉場とかを第一に挙げたいと思います。過去はほんやりしたものです。そうして何処どこかに懐なつかしい匂いを持っています。あなたはそれを巧たくみに使いこなして居るのでしよう。

単に歴史上の過去ばかりではありません、あなたは自分の幼時の追憶を、今から回顧して忘れられない美しい夢のように叙述しています。私は一、二、三、四、と段々読んで行くうちに此種の情調が、私の周囲を蜘蛛くもの糸の如く取り巻いて、散文的な私を、何時の間にか夢幻の世界に連れ込んで行ったのをよく記憶しています。私の心は次第々々に其中に引き込まれて、遂に「珊瑚樹さんごじゆの根付ねつけ」迄行って全くあなたの為に擒とりこにされて仕舞つたのです。だから幼時の記憶として其儘そのままを叙述していない「夷講えびすこう」の夜の事であつた」に至つて却かえつて失望しようとしたのです。

私は此種の筆致ひつちを解剖して第二番目に遠くに聞こえる物売の声だの、ハーモニカの節だの、按摩あんまの笛ふえの音だのを挙げたいと思ひ

ます。凡て声は聴きいていいるうちにすぐ消えるのが常です。だから  
 其所そこには現在がすぐ過去に変化する無常の觀念が潜ひそんでいます。  
 そうして其過去が過去となりつつも、猶意識の端なに幽靈おのような  
 臆おぼろげ気な姿となつて佇たたず立たんでいて、現在と結び付ついているのです。  
 声こゑが一種切り捨てられない夢幻的な情調を構成するのは是が為で  
 はないでしょうか。新内しんないとか端唄はうたとか歌沢うたざわとか浄瑠璃じようるりとか、  
 凡すべてあなたをよく道具に使つかわれる音楽が、其上その上に専門的な趣をも  
 つて、読者の心を軽く且かつつ哀れあはれに動うごかすのは勿論もちろんの事ことですから  
 申し上げる必要ひつもないでしょう。然しかしあまり自分の好尚こうじやうに溺おぼれて  
 遣やり過ぎた痕迹こんせきを残のこしたのもないとは云いわれません。第一編の  
 「硝子問屋ガラス」の中にはその筆ふでがあまり濃こく出過ぎでてはいますまい

か。

叙景に於てもあなたは矢張り同じ筆法で読者の眼を朦朧もうろうと惹ひき付ける事が好すきであるように見受けました。要するに水でも樹きでも、人の顔でも凡すべてあなたの眼にうつるものは、決して彫刻的にあなたを刺戟しげして見えないように見えます。全く絵画的にあなたの眸ひとみを彩いろどるのだろうと思います。しかもアンプレシヨニストのその如く極めて柔かです。そうして何処どこかに判然しないチャームを持っていきます。だから私は「荒布橋あらめばし」の冒頭に出てくる燕つばめの飛ぶ様子や、「夷えびす講こう」の酒宴の有様を叙するくだりに出会った時、大変驚ろいたのです。二つのものは平生のあなたの筆で書きこなされたものとは思えない位硬いのです。



要するに貴方の小説に有り余る程出てくるのは一種独特のムードでしょう。だから夫それがまとまらない上に、筋が通らないとか、又は主人公の哲学観などが露骨に出てくると、一方が一方を殺して、少し平生の御手際おてぎわに似合わない段違いのものが出来はしまいかと疑われます。「荒布橋」とか、「岡田君の日記」とか、「六月の夜」の一部分とかになると、其所そこに手荒で変に不調和なものが露あらわれているようです。其代りよし気分丈だけのものでも筋のまとまらない「河岸かしの夜」といったような、（其中には六むずかしい議論も織り込まれてはいるが）ただ装飾的で左程さほど他の情緒をそそる事の出来ないものもあると申し添えなければなりません。悪口ついでの序いでだから、「北より南へ」という短篇の評も此ここ処こに付け加

えて置きたいと思ひます。ああ云つた調子のもは、アナトール・フランスの短篇に沢山たくさんあります。そうして遺憾いかんながら彼の方が貴方よりずっと旨うまいと思ひます。

あなたの作に就いて情調とか、ムードとか云うものを挙げて、それを具合好く説明すれば、既に大半の批評は出来上つたように考えられるのですが、其ムードを作り上げるために、河岸かしの寿司屋やとか、通りの丸花とか、乃至ないしは坊間の音曲だけなど丈が道具になつていふという意味では決してないのです。あなたの書き下す人間が、人間として一人前に活動しつつ、同時に其一篇のムードを構成している事は疑もない事実です。亮さんでも、京さんでも、彼等のする事は皆此両様の主意を同時に満足させてるではありません

んか。「三人の従兄弟」などになると、其上に又親父さんの青年に対する反抗的な感情が一篇の主意もしくは哲理として後の方に出ています。

次にあなたの理解力に就いて一言其特色を述べたいと思います。あなたの頭の働らきは全く科学的でありながら、其濃やかな点が、あなたの情緒の描写によく調和して、綿密によく行き渡っています。そうして不思議にもそれが普通のありふれた作物のように、くだくだしくならないのです。いくら微細な心的現象の解剖でも、又は外観からくる人間の精密な描写でも、決して干乾びていません。必ず委曲要領をつくすのみならず、其所にああなたの独得の一種の趣が漂っているのです。私に見る所によると其趣はあなたの

観察が突飛に走らない程度で、場合々に適当な新らしい刺戟しげきを  
読者に与え得るからだろうと思います。「靈岸島の自殺」や「船  
室」の前半の如きは、その方面のいい作例と見て差さしつかえ支かえないで  
しよう。ことに前者に於て、ある男とある女の性的關係の階級等  
差が、あれ程細かく書いてありながら、些ちつとも卑猥ひわいな心持を起さ  
せずに、ただ精緻せいちな観察其物として、他をぐいぐい引き付けて行  
く処などは、何どうしても旨うまいと云わなければなりません。此小説  
は主人公が東京へ出てからの心の変化に、前半程緻密ちみつな且かつ穩当  
な、芸術的描写が欠けているため、多少のむらがあると思います  
が、世間でいう小説の意味から批判すると、或は圧巻の作かも知  
れません。

要するに貴方の書き方は絹漉し豆腐のように、又婦人の餅肌のように柔らかなのです、上部ばかり手触りが好いのかと思うと、中味迄ふくふくしているのです。線でいうと、外の人の文章が直線で出来ているのに反して、あなたのは何処も婉曲な曲線の配合で成り立っているような気がします。しかも其曲線のカーヴが非常に細かいのです。外の人が一尺で継ぎ易える所を、あなたは僅か一寸か二寸の長さで細かに調子よく継ぎ足しては前へ進んで行くとしたか形容出来ません。其所にあなたの作物には、他に発見する事の出来ないデリケートな美しくしさが伏在しているのでしよう。もう一つ比喻を改めて云えば、あなたの文章は楷書でなくって悉く草書です。それも懷素のような奇怪な又飄逸なも

のではありません、もっと柔らかかに、もっと穏やかに、そうして時々粋な所をほのめ仄かすといったような草書です。

此冗長な手紙が、もし貴方の小説集の序文として御役に立つならば何うぞ御使い下さい。私は貴方に対する愉快な義務として、それを認めましたのですから。

一月十八日夜

夏目金之助

木下杢太郎様







# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

※吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、1915（大正4）年2月。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：※底本では、促音、拗音のふりがなは普

通の大きさの仮名になっている。(校正者記す)

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木下柰太郎著『唐草表紙』序  
夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>